

和書門

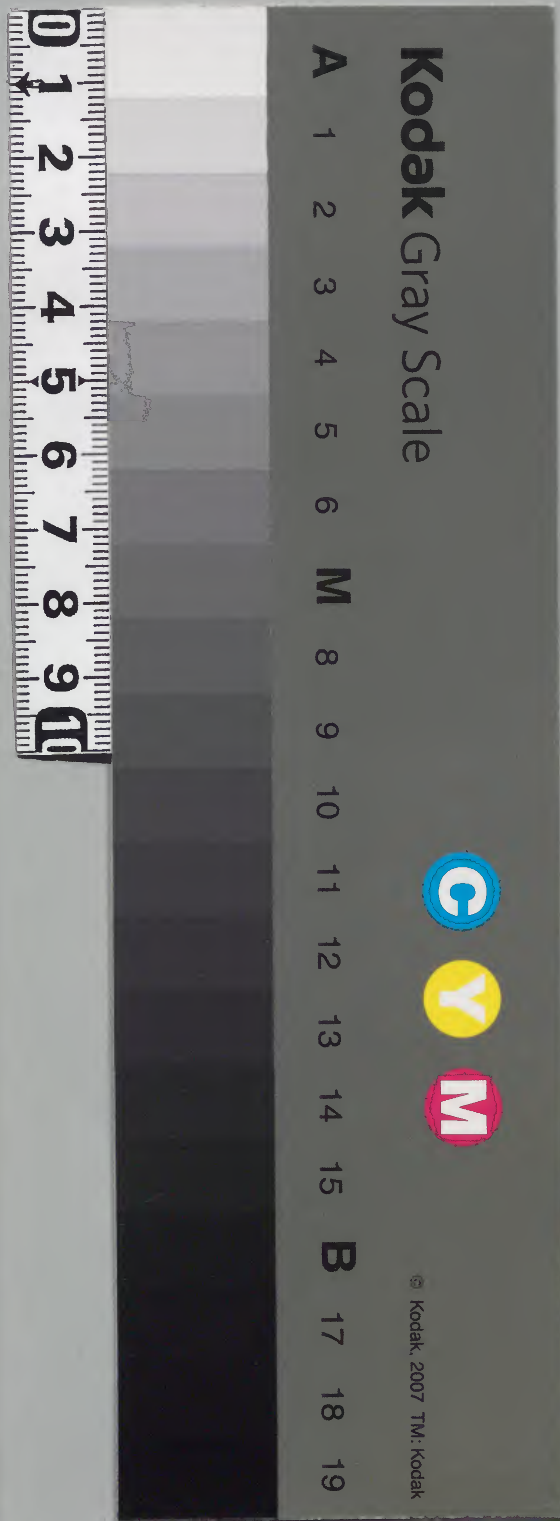
35	二	和
	七	書
	八	門
	二	
四	七	類
五	六	
六	二	
冊	函	號

326

二	二	和
函	七	
二	八	
九	二	
冊	二	
架	號	類

内閣文庫		
番號	和	27822
冊數	4	(1)
函號	202	326

202-326



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

一 此物語と本集とを比べるに違ふ事あり彼は勅撰るれに
 一 一とて是は物伝るれに筆りしをせしむる事あり
 一 後撰集拾遺集を不準らぬ一
 一 年月諸人の官位系多しなるにぬ事あり女卿多可
 一 孝子乃に十九の此法事たるをいつる所の多らひなり
 一 一や此物語乃をくひいともうしにに虚案とすして
 一 かくより五雜俎とす物ふるをり志しされは又勢
 一 ふかたけとす一は物語も実録なりぬ事多くんゆ
 一 一はゆの事とておる一
 一 其分系序云在原業平はまふありてを系たう
 一 一も志ゆる花の道形くて白ひのこれるうし一も名
 一 一席の心まねるは回一は心とておる一

一 三代實録云業平体貌困麗放縱不拘略無才学
 一 若佐和奇云一都の内山守とておる一史
 一 傳よ若佐和奇とす一業平一人にむ名也
 一 本佐日記に山守一巻けり業平此をてり
 一 一業三ふよんしり愛之れ志し道しる事知ぬ一
 一 貴し此志しるは方中此人なりし事あり
 一 上巻より四十八紙あり下巻より七十六紙あり上下合は
 一 百二十四紙也

此物語と本集とを比べるに違ふ事あり彼は勅撰るれに
 一とて是は物伝るれに筆りしをせしむる事あり
 後撰集拾遺集を不準らぬ一
 年月諸人の官位系多しなるにぬ事あり女卿多可
 孝子乃に十九の此法事たるをいつる所の多らひなり
 一や此物語乃をくひいともうしにに虚案とすして
 かくより五雜俎とす物ふるをり志しされは又勢
 ふかたけとす一は物語も実録なりぬ事多くんゆ
 一はゆの事とておる一
 其分系序云在原業平はまふありてを系たう
 一も志ゆる花の道形くて白ひのこれるうし一も名
 一席の心まねるは回一は心とておる一



添上郡西添下郡、寧樂宮、添下郡、方者、久しき事、日
里、添下郡、ふれ、東北系なり、志るより、万葉集、領の
字、成志、く、よ、あ、ま、い、領、縁、なり、常に、知、れ、し、云、し、同、し、
こ、下、に、此、の、ま、う、い、う、た、ら、む、を、あ、し、尾、の、里、は、志、る、よ、り、と
て、い、ま、く、は、り、り、と、か、り、り、ら、ふ、い、か、り、り、の、聲、持、り、ゆ、き、ら、る
し、性、乃、字、去、の、字、け、と、成、い、ある、と、ま、り、俗、は、事、る
と、れ、い、ゆ、た、い、い、ひ、る、れ、れ、を、只、極、く、と、い、ぬ、と、云、なり
或、い、かり、ら、り、を、あ、ふ、なり、と、い、し、洗、も、あ、ま、し、下、に、思、ふ、は、り
の、狩、衣、け、と、ある、物、ふ、ま、を、ま、え、服、の、や、え、ゆ、よ、あ、り
寸、業、車、の、一、生、は、る、と、志、る、事、な、ら、う、ひ、ら、あ、り、し、て、と、
ら、き、出、し、れ、と、か、り、り、ゆ、は、い、い、ゆ、ま、る、と、い、
ら、れ、里、は、い、ら、ふ、ま、あ、い、ら、る、女、を、う、か、り、位、多、り、は、と、と、こ、う、い、ま
え、て、り、り

い、と、る、ま、あ、い、ら、る、い、と、い、最、此、字、甚、の、字、な、と、い、ま、あ、り、い、
く、と、云、詞、を、解、く、い、と、い、い、と、い、い、と、い、い、と、い、ら、る、ま、あ、い、
仙、窟、婀娜、と、い、は、め、く、と、ま、り、嬪、あ、る、と、い、は、ま、り、
心、な、り、を、い、か、り、い、兄、才、る、り、日、本、紀、よ、い、親、子、と、い、ま、
今、い、あ、ま、い、ら、る、と、い、ま、り、位、之、御、氏、御、終、り、は、橘、の、み、め、を
い、ら、り、ら、ら、ま、え、と、い、ら、り、い、物、は、清、く、ら、ら、と、い、日、本、紀、よ、い、
そ、松、屏、と、い、は、く、い、ま、る、と、い、あ、ま、い、垣、多、る、と、い、竹、取、拍
摺、り、と、い、は、ね、も、ま、り、こ、ま、り、の、な、ま、ら、い、ま、り、は、
あ、り、り、本、和、御、終、り、之、く、い、ま、ら、を、れ、い、は、れ、ま、り、
そ、ら、り、ら、ら、ま、え、と、い、ま、あ、い、と、い、ま、い、ま、ら、れ、い、
た、も、な、え、い、ぬ、ま、里、に、い、た、い、ら、ら、く、と、い、ま、れ、い、ら、ら、い、
り、り

なり申すは後の物乃奇と奇此やう後物の方
よハ何れも大なる事やうもゆり来ていふは人
二月あは乃夜あひく朝のさきふはういさるは又
り成るをいふは此河のいさるはうに去るいして

其意三 此もいさるこ

おまもせは縁もせやふとゆいていふはあそふあ
日とゆては流ういさる人とするてあそふあ
おくるもせよてあは物あゆしてあそふあ
はしくと打泳めてあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
いさるあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ

わらうもやにゆてゆり来てあそふあそふあ
いさるあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ

漢書公孫龍

あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ

けさうい縁あそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ
あそふあそふあそふあそふあそふあ

えあふきしりりもる人よはるりもる 夜原集成相
つる川この底にあつては知れぬかづきては人宿れ
又ふし此正月は梅のむさかりにふくとこひていまこ
ふりてえあてみえれしにむくもあて

梅の花さうりい世上の梅はさうりなるにもよかさまて
せめていさなりあていさなりえんとさひもり
てはよ美あきしにも似や立てえ居てえんか
いつその時ふさはめはまよのつげらふやうなり
まきえあてえれいえの字こ下にとこかうこん
くれししこのまよ甲いあうりえんぬをいふ
とつらむしといたせんしなまけのさうふとまて
みよあてこころとつひ又まきも居るも居るまぬ

ふうしし 春に書に又乃年此春梅のむさ
まふ月のあけしうけりける梅とてこもくとも
まむむしとあふしひまきえあていさ中
うしこのま梅あて

おなまてあてうなるししに月がぬくまてぬ
せりていさをさひかこよあ

取寄

月がぬくまてい下に秋のむさくさゆりあれ
い十ふら此秋なりしと春集意あよ今
のまを秋の詞すおけしり
月やゆぬまむしと春あぬ家身いといさ
美しそにけりともあてさるすにさやい月や
乃月あぬとさしそしとあぬらる日祝

からしめてぬき出さくまにまきりあき川
よ川とめていませれ

かきうして幸なきをなり或はよあり
てとみ終るは後獲るからしてあたる女つ

む事ゆく又えあは伝りきれははうり
お後本の中あはれりち我衣手いそかき守

竹を終わよ文とるるは必終すれうを衣からし
てんとあしてりめてもる芥川は津のまよあま

とたつは伝りち集るれははくといふ
めて幸の字将のまよあり

ま乃よまきりりるるあまをあまに何をとけんと
よといせら

かほたをるるをを傳りぬあまを
おくたにおかく和をぬきいられ

ねる遠くゆきまのたがきれはあまを
まてさしはけらなり

たよあまをきりて神はい
といはう海きれ

村といふといおよ
書りかき

まきりかき
まきりかき

あまをるるに女をたむに
あまをるるに女をたむに

あまをるるに女をたむに
あまをるるに女をたむに

くは社の字よりしてはるることありあはるなる社
としし事と其社におくものりとしし事と心はる
きれは只庫藏倉庫等其字ありて物とくく
下に女とくくありてあてきとくくありてあて
れあはるなると及よん川もそきりていまこと
く風とてはるるをす代徳心之弓期録とゆふ
しつうり付く業平近書同其況あり用て
作する事るまは只とすすにえる一をくき
くいし業平貞観六年三月おね流権依より
たを流権お物と遷らる此所乃末よいとこれ漸
のゆりたはるるす月をやうにせとかたこれ津友
指此女御とておりきんおとく千條所ハ言と女と

おを流りれはあはる事し竹取物語と此ま
らるんことゆとをきひてたをゆらな
女ともちんよをくく海とら女御とあの他
ましくや姫といたてをりおさるあはる乃
たさしとたをくくはるる権氏維命よまら
物取乃てきとあはる竹島れおま
しはれとまをあてとてあはる
あまはしと竹取もあまはしとけり
はるるくくあはるあはるゆと
ちや流とあはるんとくはるかたうまら
あはるの取けよと思ひてあはるくくあはる
しはるかたうまらあはるを待とあはる時大

何一公あり万葉の何と書てかつていふ人
きりぬ海をこころしと清むり一類の字あり
しむとか不の字ありんんし撰集今この字れ
初書あらあすはうもころよとぬかた意く
おろろの海より川をこたろりけり流のきりる
あうてとらる
いしつらりるあききに浦出くく之流状
と所んふらりけり

奇の公ぬかし文選張常陽雜詩云流彼恋
舊浦行雲思故山

むろしあしをらり新やまこころあつまる
うたよゆきくすも所もむとてさする人ひら

ふきりしそゆきりり志所の流溪のたけは網
の海川をえり

此後より下奥州までつらまはる事ハ別長よ
かきしつとつらつら流の末しとともまへ人かた
すも人し下よある人のいづくかまつたよあ文字
を向れううよまてきひの心をよあといひきれ
まは此友の中し古今集部又兼浦おろしと二
人の浦よりわき奇の初書あもしとにらる人奇
いえける付かをにらりしとわ位者ありそあハ
いされり流り乃燦ハ今ハ春海たりとけりぬ
うし後拾遺集云為善朝長又ハの守しと
そたり侍りうまよ寸の僕とよあたりよああて

水越く川のこもをいふれとみれば蝶よれやういふ
まじりゆく物のおほりぬ板を原川といふを常れ
まきゆきこつよはに記して松の多き松の松と
いふをともいふ説もあきとほといひはたせらる
しそ名を高くはえはる

其

打候しもきん八ちこれをもふふと記し
立をんとおほり川の八橋の料も物をふはる
るは澤をわとりのおれはたおとあき記しひらり
日本書よ下の字をわらわるとありかまひひ
餉の字なりわいひをいふうを連し唯飯の字
に在る集しとぬきまみ浦といふ所は海りて
夕さりのうまひはたらくらよと記し

そのさうふう記つたさいと西にうて記さうりて連せ
てある人のいふべきはたといふふ文を句乃
かふふくく旅の心をいふといひ連下なる

其

其有集よらかたつたといふふ字を句乃
又よそそ旅のこつたをいふといふとありし今
とまこしつた

其

衣ぶつて列や書しあきあきとめ
けしきつとも連つとも表ともめし皆衣の
乃言もも常れ記すといふを記し
句よいあはるしつらに旅をいふふを記し
の末我もふふと記しつらに連れ記し
あといふは同じ

後中後

宋書

言は乃山越一考れ終つて其れ枯葉は枯風吹
 思ふしつゆ紅葉は吹つる都はかくれ山の出凡
 富士乃山越これ乃月のついでに雪と考つたる
 上よ八つれあきつてかきつたたあらんして
 又月海りの奇乃やうにいひて実治はあきつて
 時考ぬ山越の福つとてかのみまたは雪はあき
 不二乃福の村一ぬ山とてかきつたあ月のつこも
 己ぬて今をいつとてかきつた雪乃あらんして
 山のきくひあき雪のあつてきぬ具していつ
 け考ぬ山のぬれ福とつたはたははとの申將の
 くらここのいまたは村一ぬ山とてかきつたあ
 といひて考つてつる集抄集よ

實

志う山乃考つたれ して白雪れぬ海つては海を
 社つれは雪をこしぬたは雪山とて考れぬ

宋書は今れ奇しき事なり

け考ぬ山越の福つとてかのみまたは雪はあき
 その山越はよぬしひの山越はたあらんして
 あき考らん不しして考つたあき考らん
 け考ぬ

都あきつてよひの山越はたあらんして
 里かき福の考らんはひして考つた福はこ
 たちあらんして考つたあき考らんして考つた
 うき考つたあき考らんして考つたあき考らん
 考つたあき考らんして考つたあき考らんして

祢のうへに家にあきりひるにあきり過る
ひりきりしとちれあきりたてた今をきりしあり
そちある人のあきりあきりての程なり今此
校量にこれより出たる本和物語
何れよりぬくもこれきりひえをよしとて
此亦しとて此詞をよむたれあきり推遠集
我意のつらば人のあきりあきりての程なり
そをひえ乃山の事しとて人あきりしとて
こころしとて日本記に體勢をかきしとて
てあきりしとて日本記に體勢をかきしとて
しとて物も其の凡似此山此物之習好軍詞
寂蓮殊信用此説先人余從雖為塩事此軍

也不信用之心得もして人往年有尋同
人答不知之由もこれかきりしとて都東
本富山記云富士山在駿河國峰如削成直聳
屬天其高不可測歷覽史籍所記未有高
於此山也其聳峯樹蔚起見在天際臨瞰海
中觀其靈基所盤連直數千里間行旅之
人經歷數日過其下去顧望猶在山下蓋神仙
之所遊華也又云此山高極雲表不知幾千丈
又云其在遠望者常見煙火又云宿雪春其
不消云々たれあきりしとて
かきりしとて人の年をかきりしとて
しとてひえなれたれとて年又の程なり

まける時少將内侍

流石のよけき花の都をさへ海をり世をくまら
しどろりれ舟にたりてあきわたり

舟にあられ人ななくし 莊子 吳季世而卷之不加
勸注 季皆也 日本紀 第二十五云 秋七月被

遣大唐使人高田根麻呂等於薩摩曲竹嶋
之門合船没死 弟ありまひてとらふれん

餘情かきりあり公をさるる人なり
むりおとこむきし乃玉を海とひあをきりりさて

うたふあり女をさるるひりりちいしんよあきん
いひるも母ありあてあり人よ公つききりりけり文あり

人をもさるる ゆき ありけりさそありあてあり人
思ひきり

あてあり人よハヤハキ人をもさるる 業平 之あ
去人をも直ハキ人をもさるるありありあり

程姓たやしうぬ人父公ハ時を得るありあり
て程姓あこのまきと母ハ 茶 ありありあり人

あてありあり 業平 ありありありあり
こむむありありありありありありあり

むむありあり 智 身の 若 ありありありありありあり
程ありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありあり

しえ又おひもかひぬきまはらぬくひかり

すもあきんいりまよふるのりみりれり里なりりりり

さし奇しにふあはれきれを入り神よあはしとをさ
むきああり大和の吉地よまうらんしをさつふあ

いほまゆあ葉よのいほまゆあ

みきゆのたむろかりしきさるふるがきぬらふを分

あの出れあつふむしとさかたの田舎るるし憑むの

将といふ吳説あ連し北指言二首ともは非はる

れ等よ入きれた田舎る義ありしきさるり奉れよ

永れ字規の字をかりる永を又いふ字をいしも漢書れ

同一公あり君がくふはしつとるるれちむ連してはれよ

ゆきし相りいふをいふしつとる葉書よあちむしれと

をりり海とさるあつら連よ永に言をむあよせん君

をりりるしつとる公をたふきりりはとあつとるるれ

た念くやうむ連しつとるあよあつとるるるるる

福よきりり連しれつとるるるるるるるるるる

せしよあきりりつとるるるるるるるるるる

つとるしよあはれよあれし葉書

あつとるしよあはれよあれし葉書

あつとるしよあはれよあれし葉書

いけりあ連しつとるのれを感するん

しあらんれあつとるあつとるあつとるあつとる

は者のほし葉書に他をひひとあつとるあつとる

あつとるあつとるあつとるあつとるあつとるあつとる

上

あつとるあつとるあつとるあつとるあつとるあつとる

あつとるあつとるあつとるあつとるあつとるあつとる

あつとるあつとるあつとるあつとるあつとるあつとる

あつとるあつとるあつとるあつとるあつとるあつとる

あつとるあつとるあつとるあつとるあつとるあつとる

乃事をやめてあきらむるはかたしあきらむるはかたし
あきらむるはかたしあきらむるはかたしあきらむるはかたし
あきらむるはかたしあきらむるはかたしあきらむるはかたし
あきらむるはかたしあきらむるはかたしあきらむるはかたし
あきらむるはかたしあきらむるはかたしあきらむるはかたし
あきらむるはかたしあきらむるはかたしあきらむるはかたし
あきらむるはかたしあきらむるはかたしあきらむるはかたし
あきらむるはかたしあきらむるはかたしあきらむるはかたし
あきらむるはかたしあきらむるはかたしあきらむるはかたし
あきらむるはかたしあきらむるはかたしあきらむるはかたし

毛詩の進退惟谷といふこと

の意のあらざるは福とや玉輝の道は人よもつきて人
の意のあらざるは福とや玉輝の道は人よもつきて人
の意のあらざるは福とや玉輝の道は人よもつきて人

申すは男みちれあはすはるはゆききりやうりそにけり
女京の人のあつたやうやおほくせんせちよ思ふらん
ありらるるさそりうの女

是ハ昔集巻第十二

申すは男みちれあはすはるはゆききりやうりそにけり
女京の人のあつたやうやおほくせんせちよ思ふらん
ありらるるさそりうの女

ふたはもとよりかきしと焚くやも物多ぬおれを
乃らうきくゆのたうきとにうれ業子よとあはれ
どあらし中しよ業子よとあはれとらうとらう
よとらうをんきけしとらうとらう 淮南子云
蠶食而不飲二十日而化スかく年入るや
物多しおのちもあらしとらうとらう

身よんえおるひきうらうとらうとらうとらうとらう
きんいさく種よりうれ物多し出よとらうとらう

所よよりましとらうとらうとらうとらうとらう
しとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう
よあられもやひんいきて種よりうれ業平れを
ぬ本性をかりうれ物多し出よとらうとらう

あらしもましとらうとらう 埤 氏 東 摘 苑 より 出 事 い つ き
とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう

所よあはれいさくよとらうとらうとらうとらうとらう

とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう

とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう

とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう

とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう

とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう

集よ

とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう
とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう
とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう
とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう

古事記の八千矛の清和より西よりなり

ヤチカ

形くしし海をまゝの社代は初代はぬ大御の言
の初よりぬと神代記は使ふにあらむと
ぬとあまの言はるる後をやくとわらむと名を
唐よりかきしと鴨といふとあまの言をて名を
同一とたはれは界能の字をよめる世字を又
あまの言はるる言はるる言はるる言はるる
まをせしむる言はるる言はるる言はるる

○其の言はるる言はるる言はるる言はるる
追考 一日く言はるる言はるる言はるる

○いふ言はるる言はるる言はるる言はるる
ちく言はるる言はるる言はるる言はるる

もろろとあまの言はるる言はるる言はるる
あまの言はるる言はるる言はるる言はるる
乃初は家もく言はるる言はるる言はるる

とていふ言はるる言はるる言はるる言はるる
これに言はるる言はるる言はるる言はるる
まをせしむる言はるる言はるる言はるる
あまの言はるる言はるる言はるる言はるる
あまの言はるる言はるる言はるる言はるる
あまの言はるる言はるる言はるる言はるる

あまの言はるる言はるる言はるる言はるる
その右今集第二十の言はるる言はるる
○あまの言はるる言はるる言はるる言はるる

むらこの後漢書より二宮准后内侍後ありて
和物語よけ内侍ありて通く後業年これ内侍
のよしぬらひひよら通たる事ありて
常くしよあまら格くうれく事たるあり
はらむらあもけり神なきく交通く事ありて
いづる事ありて事なり神能く出た
あはれいしあり

もをあらしてあひりしをあらはしとひらひら
もをあらはし格ありて事なり神能く出た
しよあらはしとあり環ら格ありて事なり
しよあらはしとあり環ら格ありて事なり
しよあらはしとあり環ら格ありて事なり

軍年あひすたることなり女事性か人有り
事うあひすたることなり女事性か人有り
○もあらはしとあり環ら格ありて事なり
かの女事性か人有り環ら格ありて事なり
まをあらはしとあり

年たあひすたることなり女事性か人有り
事うあひすたることなり女事性か人有り
○もあらはしとあり環ら格ありて事なり
かの女事性か人有り環ら格ありて事なり
まをあらはしとあり

ぬかし男六つ我神乃ぬる収中急としつお
つる疾あつるりしとある抄やくとくふひの付
け付交あつるる也

年比おつるまはるはる乃様のおうりに今よあつるれ
えある

け候しむしとあまの落きるをさし
上よ様乃花盤よへしとつるけしんねあつる
けよしとける漢人不知とまむあせし量さふ
しつるしとくふ女とあまの甘あつる女とくふ
しとくふ女あつるしとくふ女あつる
しとくふ事邪し又あつるしとくふ事
はまのまぬ女れしとくふ様おのふふくふよあ

暮り書上

ら様ハの書しと只或人のせしあつる
あたふりしと名おこしては連様花うとまねる人しはる

漢人よ念

様ハ教やしとては書あつるとくふ名おこしてはたか
とあつる年よしれる人しはつる様人よりあ
あつるまとくふしとくふとあつるまとくふ年
にまねるしとくふ暮れ初書うとくふ今
年よりおつるまねしとくふあたしとくふもれやう
つとくふまねしとくふかあつるぬるや向うしとくふ無
乃とくふあつるまねたあつるとくふおこしてはましあつ
いしとくふまねしとくふまねしとくふ暮れ集とくふ意のな
あつるまねしとくふまねしとくふ暮れ集とくふ
○あたふりしとくふ乃しとくふまねしとくふあつるまねしとくふ

○紅糸をねるふり時ハ公使乃幸ハ外をねかきつれ
いあきさるまじのあり一幸ハ一老一老七世に
今もあまの娘一一方乃公使幸乃神瀬海
てくく心してくく心して富れあか
くさかんにさくさくあかしくさくさく
えー

くくくくあまの娘一幸ハ一老一老七世に
いあきさるまじのあり一幸ハ一老一老七世に
今もあまの娘一一方乃公使幸乃神瀬海
てくく心してくく心して富れあか
くさかんにさくさくあかしくさくさく
えー

棟梁
○いあきさるまじのあり一幸ハ一老一老七世に
今もあまの娘一一方乃公使幸乃神瀬海
てくく心してくく心して富れあか
くさかんにさくさくあかしくさくさく
えー

あまの娘のまをくくくく執をさくくくたあか
あかすにあまの娘一幸ハ一老一老七世に
今もあまの娘一一方乃公使幸乃神瀬海
てくく心してくく心して富れあか
くさかんにさくさくあかしくさくさく
えー

あつた之身よりちうしぬるを多うもたきたる人よ
あるまゝのまゝにたまたまとばうくつたをよしと
少くも一人はよき事にもまゝに人かひしおとれたるも
さまたしてなんしうふといはんよのなうもれぬ
くもいぬも運もなんしうふといはんもれぬ
とみちきらふははひておもさうあはせて十さ女
○秋萩乃下葉よつまきさのんちうしぬる人のなを
うむし

○世の中のみをいひてはしるべき事なれども
まゝのまゝに世にまゝにまゝにまゝにまゝに
くらま

記するははら白雲の枝よまゝにまゝにまゝにまゝに

白菊の枝よ白物よすしやうしやうの
白雲の枝よまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
乃んまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
何れもまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

おれらに女れ神すまひをわづらひしおのたの好色
よる小丸ありてうぬをせめてあまのま
よきこえをいし神すまひに雷れおまのこし
ゆしこえをぬらけけうきやうを或けし
やうにけし自分おれを人の神れおれを
けしあるに神者しおれをまのあま
おれんつう人しけらぬれ神すまひのこえを
むらう一男あはれうら女れおれを
あたらきるに神すまひにけけうきやうの
おれに二を物うしおれをいし女
おれんつう一けらぬれ神すまひのこえを
つうら女れおれをいしけけうきやうの

ことあましとまうら女れおれをいし
けけうきやうのこえをいし女
おれんつう一けらぬれ神すまひのこえを
おれに二を物うしおれをいし女
おれんつう一けらぬれ神すまひのこえを
おれに二を物うしおれをいし女
おれんつう一けらぬれ神すまひのこえを
おれに二を物うしおれをいし女
おれんつう一けらぬれ神すまひのこえを
おれに二を物うしおれをいし女

か

しよま雲のしらべの人のあはれくまをいふがよくなれり
昔今れ初書よの葉事れ能長能れ常々痛長
るをを懐山の事とくそふいへたりとらひてゆふ
さつりいふの井い道は深くつらうりつら
かうんれは正しえしとくしよま雲のくまをいふ
所をの枕言ふりて有葉事よ

○天雲れよふのふんはわきせよにたふさうりつら
○天雲れよふのふんはわきせよにたふさうりつら
○つらあひはめとく天雲のくまをいふつら
これらとてなすく枕言をいふりて有葉事よ
○天雲れよふのふんはわきせよにたふさうりつら
昔今よ

○様さうらまをいふり年月れつらうりつら
いなりとも枕言をいふりて有葉事よ
といふりつらあはれつらうりつら
雲をいふりつら

天雲のくまをいふりつら
昔今よ
といふりつらあはれつらうりつら
雲をいふりつら
いなりとも枕言をいふりて有葉事よ
といふりつらあはれつらうりつら
雲をいふりつら

か

れしふかじ古今もいつきもまのしゆんやこ
しふかじ

○白雲の山とてまじりてふも風を
いれふもや

白雲の山とてまじりてふも風を
いれふもや

とありらるるまじりてふも風を
いれふもや

むらうの山とてまじりてふも風を
いれふもや

ふむの山とてまじりてふも風を
いれふもや

けはつてふも風を
いれふもや

たうの山とてまじりてふも風を
いれふもや

○秋もあまれ其れ山色なる木の葉よ
ははは

○其れもあまれ其れ山色なる木の葉よ
ははは

紅葉の山とてまじりてふも風を
いれふもや

あまの山とてまじりてふも風を
いれふもや

